玉名市文化財調査報告　第38集

築　地　館　跡

－玉名市築地における共同住宅新築工事に伴う文化財調査報告書－

平成30(2018)年3月

玉名市教育委員会

序　文

玉名市は熊本県北部地域の水域を集めて流れる大河菊池川の河口部に位置しており、太古からの長い歴史があり、豊富な文化財が見られる地域です。近年では九州新幹線が開通し、県北部の政治経済や教育文化、さらには観光の拠点として、さらなる発展をとげようとしています。

このような中、市の発展に伴うさまざまな開発事業と文化財保護の円滑な調整のため、玉名市教育委員会では文化財保護行政の充実に努めているところです。

埋蔵文化財の発掘調査もそのひとつで、その成果の公開や活用を通じて、広く教育や文化の発展につなげることができればと考えております。

本書は、共同住宅新築工事に伴う築地館跡の発掘調査の成果をまとめたものです。本書が市民の方々の文化財に対する理解の一助となり、又、学術研究にも広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査並びに報告書作成にあたっては、各方面で多くの方々に多大なご理解とご協力を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げます。

平成30年3月27日

玉名市教育委員会
教育長　池田　誠一

例　言

1．本書は、玉名市教育委員会が平成28年度に実施した築地館跡の調査報告書である。
2．調査は、玉名市教育委員会文化課蜷父雅史、古森政次が担当した。
3．遺構などの実測及び測量図は、調査担当者が作成した。
4．調査時の写真撮影は、調査担当者が行った。
5．方位は磁北を示す。
6．調査地の地番は、原則として文化財保護法に基づく届出・通知の際の地番を表示している。
7．人骨の調査・鑑定・保存処理については、NPO法人人類学研究機構に委託した。
8．同遺跡の調査は複数回行っているため、第１図に、今回以外の調査地には黒丸を付し、横に調査年度を記した。
9．出土遺物の整理作業は、古森が担当し、玉名市文化財整理室で行った。
10．遺構の製図、写真撮影は古森が行った
11．本書の執筆、編集は古森が行った。
12．出土遺物は、玉名市文化財整理室で保管している。

本文目次

序文
例言
本文目次
挿図目次
写真目次
第１章　調査の概要
　１　調査体制 …… 1
　２　調査の経緯 …… 1
　３　調査の方法と経過 …… 1
第２章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 3
第３章　検出遺構と出土遺物
　１　調査区と基本土層 …… 5
　２　検出遺構 …… 6
第４章　熊本県玉名市築地館跡出土の中世人骨 …… 11
第５章　総括
　１　はじめに …… 17
　２　今回の調査結果について …… 17
　３　これまでの築地氏・築地館についての成果 …… 17
　４　課題 …… 18
報告書抄録
奥付

挿図目次

第１図　周辺の遺跡分布図 …… 3
第２図　大野別符内城館位置図 …… 4
第３図　基本土層図 …… 6
第４図　遺構分布図 …… 7
第５図　S01 実測図 …… 8
第６図　S05・11 実測図 …… 9
第７図　S09 実測図・土層断面図 …… 10
第８図　S10 実測図 …… 10

写真目次

写真１　S01 調査の様子（南より） …… 2
写真２　S05・11 調査の様子（西より） …… 2
写真３　S10 人骨調査の様子（南より） …… 2
図版１　S01 遺構写真 …… 20
図版２　S05 遺構写真 …… 21
図版３　S09 遺構写真・S10 人骨出土状況写真 …… 22
図版４　S10 人骨出土状況・S10 完掘後遺構写真 …… 23

第１章　調査の概要

１　調査の体制

平成 28 年度（発掘調査）

調査主体　玉名市教育委員会

調査責任　教育長　池田誠一

調査総括　教育部長　伊子裕幸

文化課長　竹田宏司

文化財係長　田中康雄

庶務担当　主事　西嶌涼子

調査担当　主任　蜷父雅史 (確認・本調査担当)

埋蔵文化財発掘調査員　古森政次

発掘作業員　谷口洋介　寺本涼子　出口加代子

村上厚生　西村真由美　竹内ムツ子　清田栄子

北原靖治　塚本廣二　中川幸一　髙谷健也

平成 29 年度（報告書作成）

調査主体　玉名市教育委員会

調査責任　教育長　池田誠一

調査総括　教育部長　戸嵜孝司

文化課長　竹田宏司

文化財係長　田中康雄

庶務担当　主査　蜷父雅史

報告書担当　埋蔵文化財発掘調査員　古森政次

調査協力　嶋村裕徳

２　調査の経緯

平成 28 年 5 月、共同住宅建設計画における事業照会を受けて、工事主体者から文化財保護法第 93 条により熊本県教育長あての届出 (平成 28 年 5 月 9 日付) が提出された。6 月 7・8 日に計画地内の確認調査を実施した。その結果、計画地内の北側で主に弥生時代の遺構が確認された。

遺構が確認された区域は、進入路及び駐車場予定地であり、1 m 以上の掘削が予定されていた。このため、設計変更等の協議を行ったが、変更が不可能であることがわかり、追加の確認調査を 8 月 17 日に実施し、工事による埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲を確定した。

届出を県教育委員会に進達し、熊本県教育長から工事前に発掘調査を実施するよう通知 (平成 28 年 8 月 26 日付教文第 1284 号) を受けた。

通知を受けて、玉名市と主体者で発掘調査についての契約書及び協定書を締結した (平成 28 年 10 月 5 日)。その後、玉名市教育委員会から文化財保護法第 99 条により熊本県教育長あて発掘調査の通知 (平成 28 年 10 月 5 日付玉名市教文第 250 号) を行い、発掘調査に着手した。調査地は、玉名市築地字八反 1816-1 である。

３　調査の方法と経過

（１）　調査の方法

確認調査の結果、遺構が検出された範囲で工事の影響を受ける駐車場予定地においては発掘調査が必要となった。協議を行い、切土となる 730㎡を調査対象とした。ただ、調査区の中央部分はトラックなどの通路が必要であったため、表土剥ぎを行い遺構を確認し遺構は検出されなかった。このため、調査区は東西に分かれた。その後、調査区全体の遺構検出を行ったところ、確認調査の時点で遺構と判断していた部分が、上層の黒褐色土層の残存部であることが判明し、当初見込んでいた遺構密度よりは少なくなった。

遺構と判断したものは順次番号を付し、ベルトを残し掘り下げを行った。また、調査区の基本土層を押さえるため、全体の各ポイント（11 か所）で柱状図を作成した。遺構の平面図は座標軸に沿った 10m グリッドを設定し、1/20 で実測した。S10 においては、掘り下げ中に人骨が出土したため中断して、ＮＰＯ法人人類学研究機構に取り上げから鑑定、保存処理までを委託した。遺構の完掘後に全体の測量を行い、調査を完了した。

（2） 調査の経過（日誌抄）

〈10 月 11 日〉表土剥ぎ（一日目）。柱穴列を確認。黒褐色の埋土であるようだが、褐色土に炭や赤褐色土の粒子が混ざる土層が溝状に確認できた。おそらく中世の時期にあたると考えられる。今日剥いだ部分の東側 2/3 では、試掘で包含層とされた黒褐色土層が見られなかった。おそらく、黒褐色土の包含層の広がりの中に住居跡が存在する可能性が高い。

〈10 月 12 日〉表土剥ぎ（二日目）。遺構検出面は結構深い、50 ～ 70㎝ほどある。

〈10 月 17 日〉遺構面清掃。遺構検出。S01(2 間× 3 間、 4 面庇付)、02(近世溝か？) 検出。S02 掘削。気温が高く、蒸し暑い。

〈10 月 18 日〉S01 柱穴掘削。S02 全体の掘削完了。S03 掘削完了。S01 は 2 × 3 間で 4 面に庇を持つ建物であるが、南東隅柱とその庇柱、それに隅柱から 1 本西側の主柱が検出できない。原因として、S02 の溝によって底部まで削平されてしまったと考えられる。

S01 調査の様子（南より）

〈10 月 20 日〉Ⅱ区西側に黒褐色土が広がっているが、遺構ラインが不明確であるため、 5 ㎝ほど掘り下げを行う。黒褐色土層中より須恵器壺底部破片出土。

〈10 月 24 日〉Ⅱ区西側の遺構面掘り下げで、黒褐色土は包含層であることが判明。S08 西側壁際には住居跡らしき落ち込みが確認できた。

〈10 月 25 日〉S05 は弥生時代の住居跡と推定していたが掘方が明確ではない。だらだらと埋土が深くなっていく。また、土器片も小破片が少数出土するのみである。中央部において、床面検出のためのカンニングトレンチを設定。床面とみられる硬化面は検出できなかった。

〈10 月 26 日〉S09 は S05 と同様の形状を示す。S10 は掘削の途中に白い骨片らしきものが発見されたため、竹べらによる慎重発掘に転換した。

S05・11 調査の様子（西より）

〈10 月 27 日〉S10（土壙墓）の骨片は、北側に頭骨のカーブを残しており、歯の部位に白色の破片も見える。また、南側には大腿骨の骨片と思われるものが南北ではなく東西につながっている。屈葬の可能性がある。

〈10 月 31 日〉S10 掘り下げ継続。 1 ㎝ごとの掘り下げを検出骨周囲で実施。大腿骨や脛骨と思われる残存部を 3 本検出。2 本は左足の大腿骨と脛骨、もう 1 本は右足の脛骨と思われる。左足の大腿骨と脛骨は曲げられており、屈葬と考えられる。頭骨周辺の掘り下げはできなかった。

〈11 月 4 日〉S05･11 土層断面図終了。S09 土層断面図終了。築地館跡を囲む堀の北東部に接して存在する当調査地点の意義を考慮する必要がある。

S10 人骨調査の様子（南より）

〈11 月 7 日〉Ⅰ・Ⅱ区遺構エレベーション設置終了。基本土層図（ア～コ）作成終了。 1 /100 調査区平板測量終了。地権者嶋村さん、施工業者来跡。人骨の取り上げを早くできないかを打診される。

〈11 月 14・15 日〉NPO 法人人類学研究機構の人骨調査。

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

築地館跡は、玉名市築地に所在する（第１図）。遺跡のすぐ北には、なだらかな山容を見せる小岱山が迫り、東西には、玉名台地を南北に浸食しながら流れる境川と友田川が十数メートルの崖面を形成している。

第１図　周辺の遺跡分布図（●は既往の調査地）

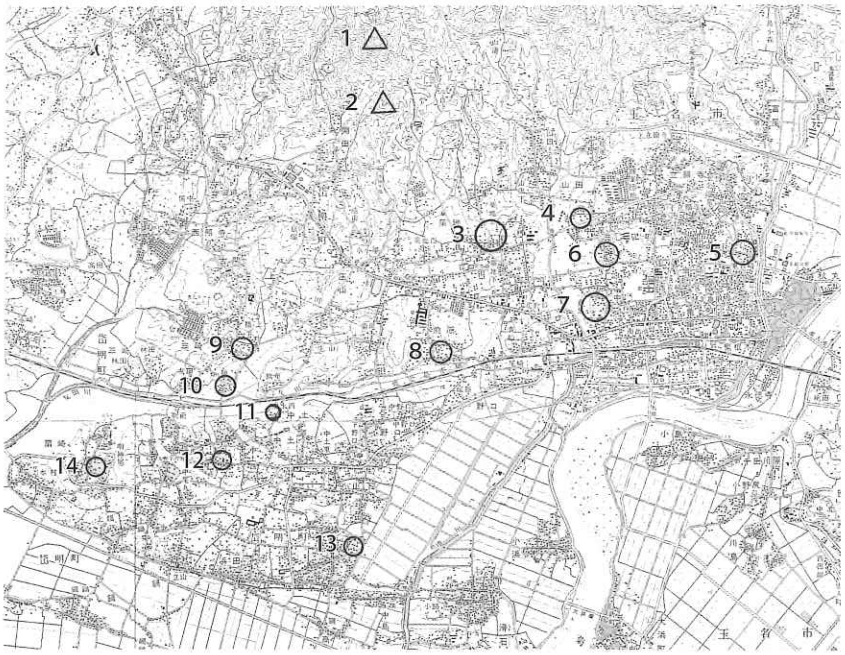
南は海に向かって傾斜する台地が続き、数メートルの段差を下り、菊池川が形成した沖積平野へと続いている。遺跡は、小岱山山麓に近接する玉名台地上にあり、南北に流れる境川と友田川が最も接近する丘陵台地上に所在する。両者の距離は、およそ 500 mである。

この玉名台地の基盤は花崗岩であり、小岱山の山塊をつくる花崗岩の隆起（中生代）の一部と考えられている。基盤の上には、約９万年前、現在の巨大な阿蘇カルデラを造った噴火により流れ出た火砕流が堆積している。火砕流が押し寄せた際には、谷や平野は火山灰や軽石などの堆積物で埋めつくされ、玉名地方は一面の平らな大地となった。しかし、約２万年前の氷河期最寒冷期の海退現象で、100m 以上も下がった海水面に流れ込む菊池川などの河川は勢いを増し、火砕流堆積物で埋まった大地の浸食を進めた。この時、浸食が進まず、島のように取り残された部分が玉名台地である。その後、約 6000 年前、氷期の後の温暖化のピークには海水面が急上昇し、現在より５m高い陸地まで海となった。このため、浸食のスピードは鈍り、逆に土砂の堆積が進んだ。土砂の堆積は、菊池川などの河川に肥沃な平野をもたらした。また、

土砂の堆積で菊池川河口域は遠浅の海となり、干拓には好適の海岸となった。遺跡の東西を南に流れる境川、友田川流域でも、浸食より堆積が上回り、谷平野の景観となっている。

このような地理的環境は、玉名地方に多くの恵みをもたらした。南に面した玉名台地は、日当たりも良く、また、水害に強い好適な居住地となり、有明海や平野は豊かな食料を供給し、小岱山は良質の湧水や燃料、それに山塊の花崗岩から流れ出た砂鉄を用いた鉄生産をもたらしている。

中でも大きな恵みは、菊池川の舟運がもたらした経済活動である。県北地域に網の目のような支流を広げた菊池川は玉名市で一本にまとまり海に注ぐ。つまり、海と川の接点に位置する玉名市は、地政学的に最も重要な位置にあり、県北地域の各地と舟運で結ばれ、流通・交易の拠点となった。この拠点に整備されたのが「津」と「市」である。つまり、港と市場では大きな航海船に乗せられた海外や国内の物資や情報が陸揚げされ、菊池川の船運で県北地域にもたらされるのである。逆に、県北の物産は菊池川を船で下り、玉名地方の港に集まり、国内や国外の地域に運ばれる。集まってきた物資の取引（売買や交換）は大きな



1　日嶽城跡
2　開田古城跡
3　築地館跡
4　中尾高岡居屋敷跡
5　岩崎城跡
6　中尾城跡・ホカンヤカタ跡
7　中村城跡
8　築地次郎国秀館跡
9　上村城跡
10　中土屋敷跡
12　下村（内野）城跡
13　高道城跡
14　扇崎北垣右京居館跡

第２図　大野別符内城館位置図

富を生むことになる。したがって、菊池川流域の県北地域に興亡した権力者は玉名地方を確保することが最も大切な政治課題だったと考えられる。

原始時代や古代の「津」や「市」の位置は不明といわざるを得ないが、中世以降は、「高瀬」や「伊倉」の津が登場する。菊池川河口の北と南に位置する両港は、肥後国内だけでなく全国や外国にも知られた港として繁栄している。

この２つの港、特に高瀬津の支配に関わった政治勢力は多岐にわたる。在地勢力としては、古代、玉名郡の郡司とされる日置氏や鎌倉時代初期に地頭や郡司となり、元寇の際も出兵の記録を残す大野氏、隣接する荒尾地域の地頭であり他国の大名と結び玉名地方への進出を図る小代氏、それに鎌倉時代から室町時代を通じて菊池川流域を主な勢力範囲とし、高瀬を支配した守護菊池氏がいる。それらに加え、九州探題今川氏、肥後の守護となった豊後の大名大友氏、肥前の大名龍造寺氏、薩摩の大名島津氏、そして、関白豊臣秀吉などの錚々たる顔ぶれがいる。

これらの顔ぶれを見ると、玉名地方、特に港の支配の重要性が見えてくる。今回、報告する築地館跡は、大野氏の惣領の系譜である築地氏の城館と考えられている。大野氏は平安時代末期から秀吉の九州平定の時期まで途切れることなくこの地に勢力を維持した武士集団であったと考えられている。したがって、その動向は玉名地方の歴史をダイナミックにとらえる上で欠かせない事象であり、その本拠地である築地館跡の詳細な研究が必要となっている。

なお、玉名市の高瀬津を含む大野別符と呼ばれる荘園内には、２つの山城跡と 12 の館跡が存在する (第２図)。特に館跡は、玉名台地上のそれほど広くない範囲に集中しており、しかもそのほとんどが大野氏一族の城館とされている。築地館跡は、谷を挟んだ東側の中尾高岡居屋敷跡とともに最も小岱山に近いところにあり、堅固な山城である日嶽城への最短の距離に立地している。

第３章　検出遺構と出土遺物

１　調査区と基本土層

（１）　調査区の立地

今年度の調査区は築地館跡の東北部隅にあたり、東西約 100 m、南北約 150 mの長方形をした平坦面の一角にある（第１図・第９図)。平坦面の西側に接するように幅 15 m、深さ３m以上で南北に 100 m以上続く堀があり、平坦面の西側を深く刻んでいる。北側と南側には東から西に谷が入っており、平坦面の東側は緩やかに下がる尾根となっている。ただ、平坦面の東端には１mほどの段差があり、平成 14 年の確認調査では堀が確認されている。つまり、この平坦面は、おそらく築地館の一つの郭(くるわ)と考えられる。

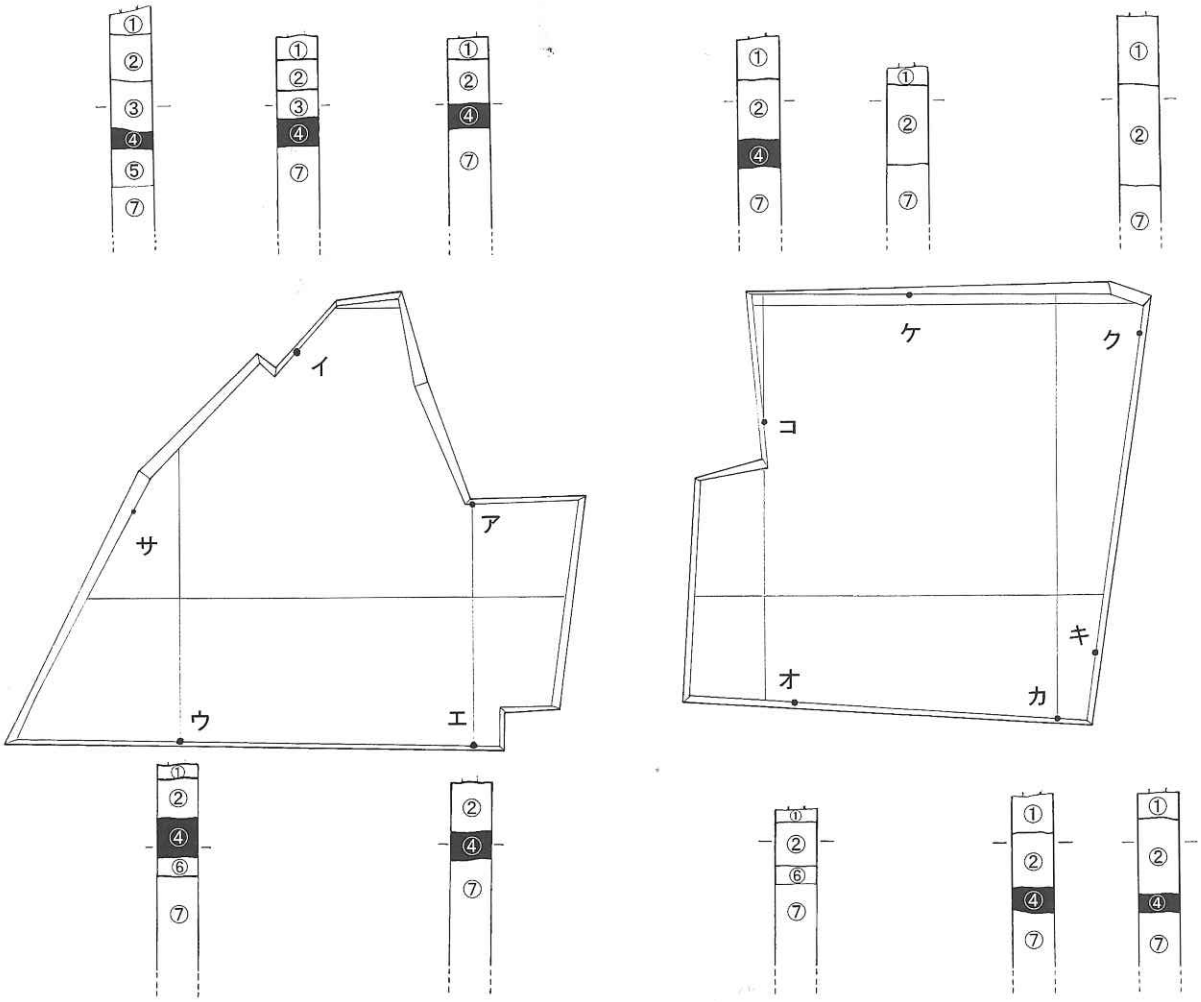
後述するように、基本土層から判断すると、当調査区の本来の地形はおおよそ西から東へ緩やかに下っていることになる。これは、第１図で当調査区から東へ尾根状に下がる平地が続いていることからも納得できる。

（２）　基本土層

調査区の基本土層は第２図に示した。ア～コ地点の調査区壁の土層断面を東西に同じレベルで並べたものである。①層は表土で、②層褐色土に黒褐色土が混ざっている。②層は砂質の褐色土で客土と考えられる。①・②層は近年の整地層であろう。③層はⅡ区の西北部に広がった層で、暗赤褐色土で白い斑点をたくさん含んでいる。硬く、セメントが固まったようである。三和(たたき)土のようでもあるが詳細は不明である。④層は粘質の黒褐色土で、いわゆる包含層である。⑤層は S09 の遺構埋土で、砂質の暗褐色土である。⑥層は⑦層が粘土化したもので褐色粘土である。⑦層は暗黄褐色土で、花崗岩が崩れて混じり合った白色細粒をかなり含んでいる。この層は乾くとセメントのように固結する。

④層包含層は弥生土器、須恵器、土師器などの異なる時期の小破片を含んでいた。したがって、単一時期の包含層ではなく、最も新しい土器が認められる中世以降に包含層が形成されたと考えられる。

これらの土層観察の結果、遺構は④層を除去した⑦層上面で行った。後述するように⑦層上面での遺構検出の結果、弥生時代と考えられる S05・S11 は遺構のほとんどが削平された状態であることが判明しており、④層が堆積する以前に当調査区は約 50cm ～ 70cm ほど大きく削平されたことがわかる。地下げの時期や理由は不明だが、中世の柱穴がかなり浅いことから、掘立柱建物の廃絶以降のようだ。ただ、④層包含層がオ、ク、ケで確認できないことから、④層が堆積した後にも削平が行われている。



第３図　基本土層図

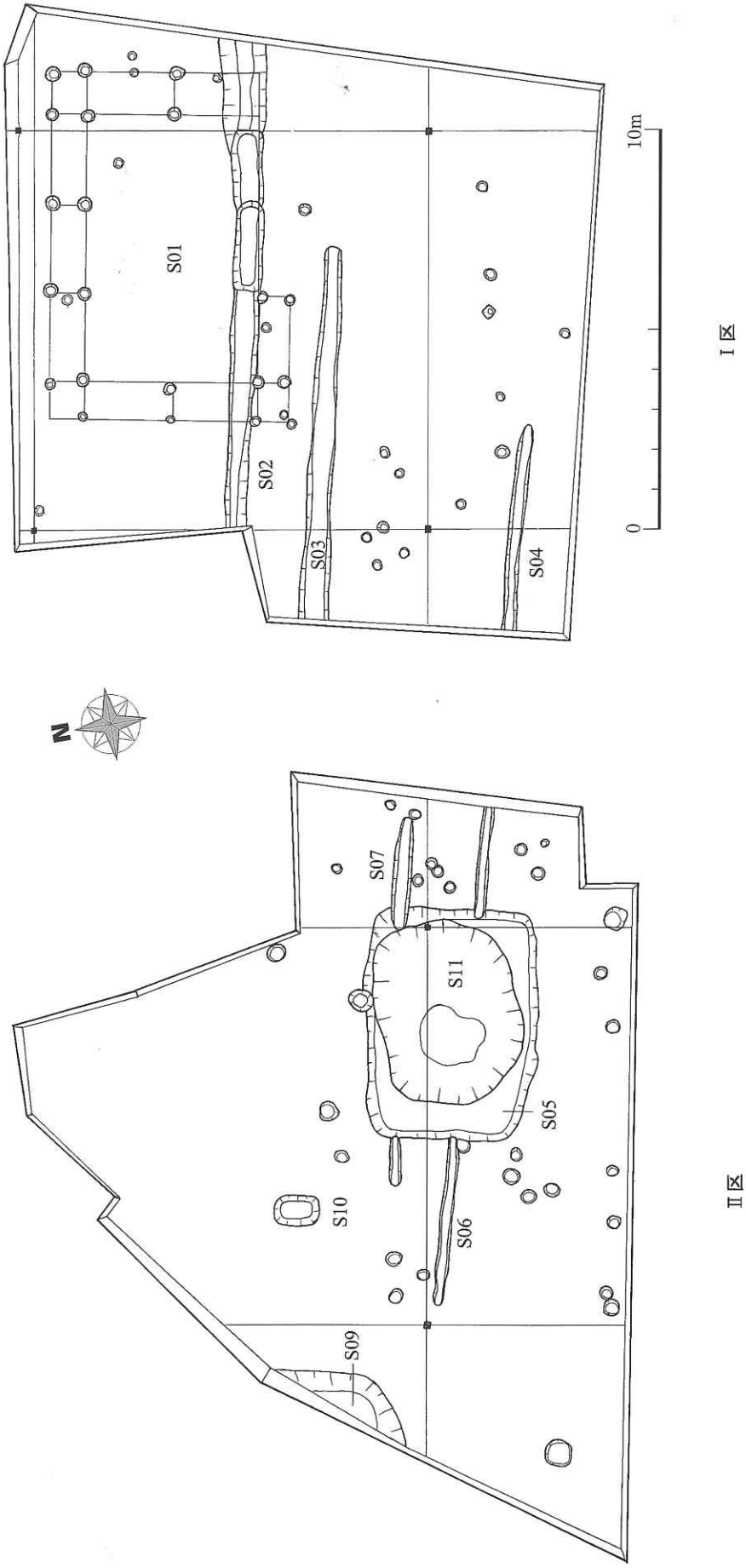
2　検出遺構

築地館跡の今回の調査区で検出された遺構は第４図のとおりである。主な遺構は、掘立柱建物 (S01)、住居跡 (S05、09)、土坑 (S11)、土坑墓 (S10) である。それ以外には、おそらく掘立柱建物と同時期と考えられる柱穴群や近世の時期と考えられる地割溝 (S02)、それに近年のゴボウ栽培に使用したと考えられる細長い３条の溝がある。以下、それらについて詳述する。

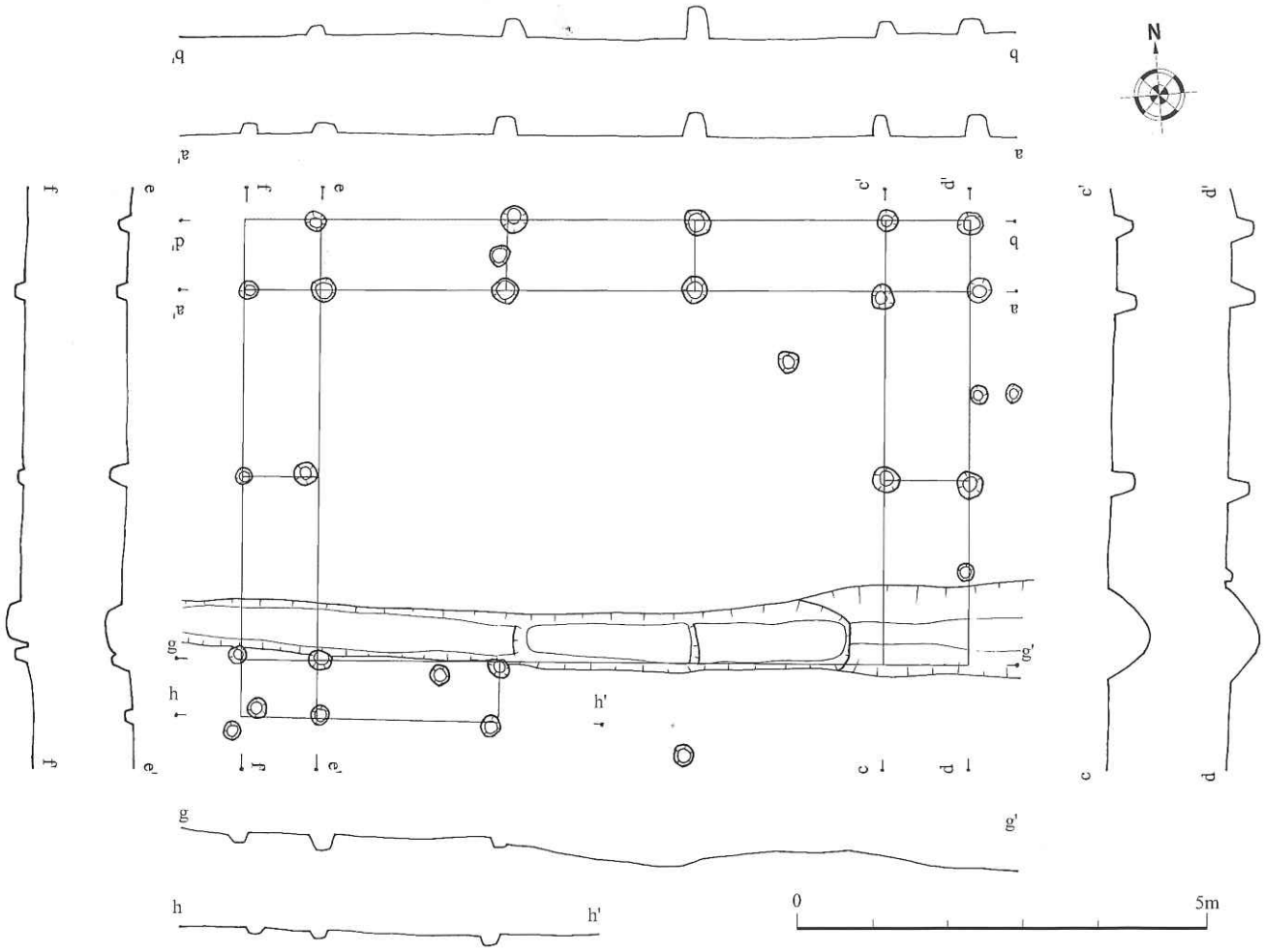
（１）　S01 (第５図)

基本的な構造は、２×３間の母屋の四方に庇を持つ掘立柱建物である。ただ、総庇ではなく、南面は西側一間のみが庇である。母屋柱と庇柱の間隔は一定ではなく、東面が約 100cm、北面が約 80cm、西面が約 90cm、南面が約 70cm となっている。なお、建物の南東部の２本の母屋柱と１本の庇柱は地割溝 (S02) により消滅している。

また、庇部分の北西隅と南西隅の柱穴も見あたらない。おそらく、この建物の敷地では包含層がなくなるほど削平されていることから、柱穴そのものが削り取られた可能性が高い。そのためか柱穴の直径は、母屋柱、庇柱ともに 30cm 以下であり、深さも 30cm 以下となっている。



第４図　遺構分布図



第５図　S01 実測図

（２）　S02 ～ 04・06・07(第４図)

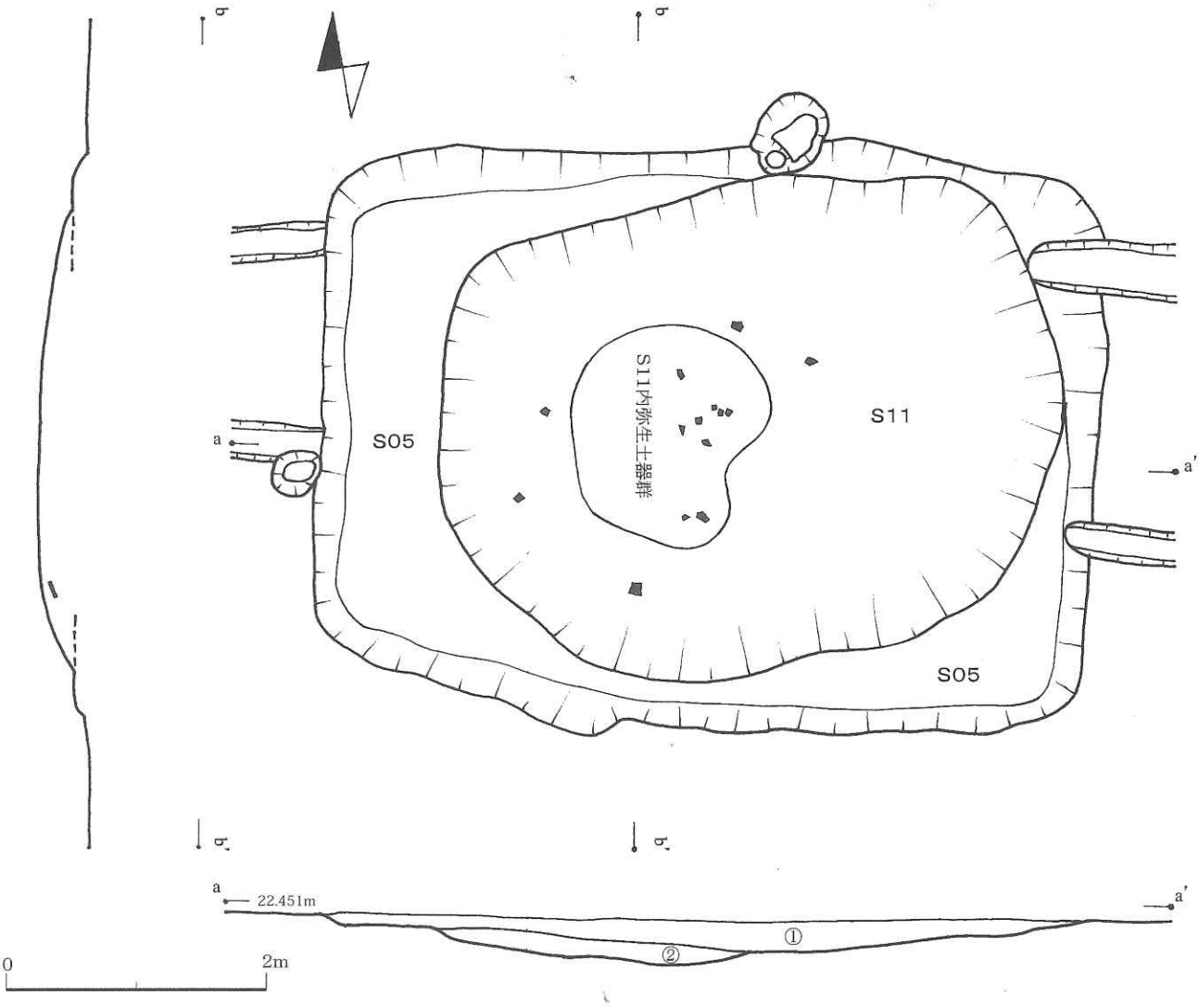
近世以降の遺構としては、東西に延びる溝が４本確認された。地割り溝 (S02) とゴボウ栽培用の溝 (S03・04・06・07) である。出土遺物は少なく、いずれも近世陶磁器の小破片であった。

弥生時代の２基の住居跡は、竪穴住居と考えられる。削平により住居跡の底部の輪郭が確認できるのみで、住居跡の構造や付属施設の確認をすることはできなかった。

（３）　S05・11(第６図)

S05 は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居跡と推定していたが遺構ラインが明確でなく、だらだらと埋土が深くなっていくことがわかった。また、土器片も小破片が少数出土するのみであった。そこで、中央部において床面検出のためのカンニングトレンチを掘削したが、床面とみられる硬化面は検出できなかった。また、当初の遺構ラインは掘り進むうちに変化し、最終的には、長辺約 6m、短辺約 4.5m の隅丸長方形をした深さ約 10cm の浅い皿状の遺構であることが判明した。

さらに、その中央部から北西部にかけて掘削可能な埋土が認められたため、掘削を進めた結果、中央部



第６図　S05・11 実測図

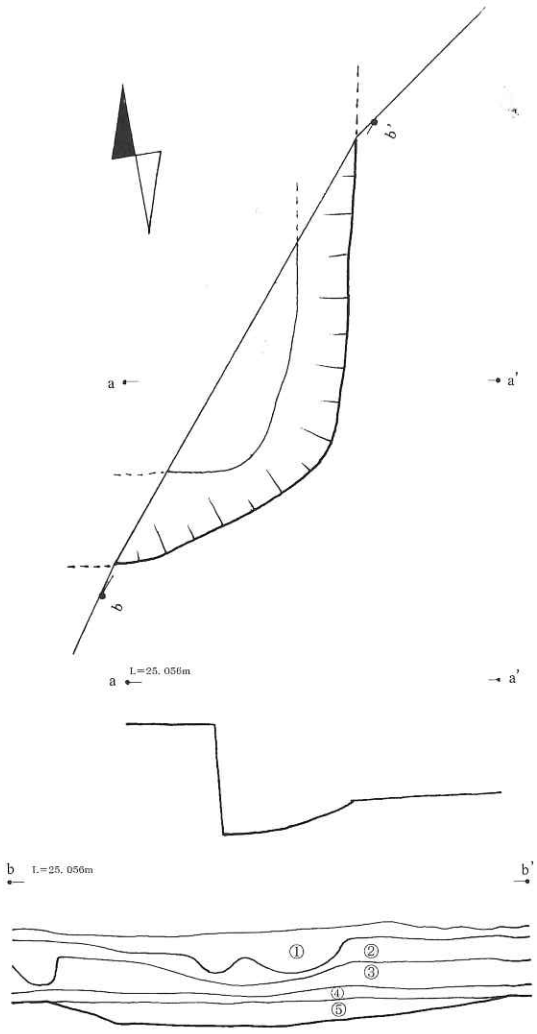
に弥生後期の土器片が集中する状態で検出できた。埋土は、遺構の上部には基本土層⑤暗褐色粘質土層が堆積し、中央の土器片が集中する部分には⑤'暗褐色砂質土層が堆積していた。

このような発掘状況を勘案して、S05 は弥生時代後期の住居跡であり、床面は後世に削平されたが、かろうじて竪穴住居築造の際の掘方の底部が残されたものと推定した。そして、住居廃絶後に土器溜として利用され、その中に土器片が堆積したものと思われる。

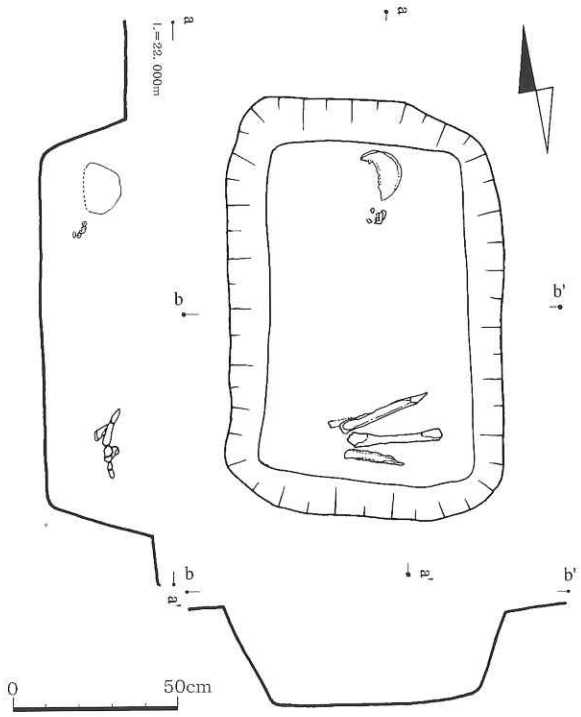
（３）　S09(第７図)

Ⅱ区西部は、遺物包含層である④黒褐色粘質土層が厚く堆積している。このため、当初、遺構として意識していなかった。包含層を掘り下げた⑦層上面で、色調の違いが認識された。このため、遺構ラインを確認したところ、S05 と類似するような隅丸長方形と思われる一角を検出した。

埋土は S05 の②層と同様で、基本土層⑤'暗褐色砂質土である。また、遺物は出土せず、本来の時期は不明といわざるを得ないが、S05 と遺構の方向が類似していることから、S05 と同時期の住居跡としておきたい。



第７図　S09 実測図・土層断面図



第８図　S10 実測図

（４）　Ｓ１０(第８図)

S10 は当初柱穴群の一つと考えられたが、遺構面清掃後、長方形の遺構ラインが明確になったため、土坑墓の可能性があると判断し、S10 の遺構名を付した。その後、慎重な掘削を開始したところ、白い骨片らしきものが発見された。このため、竹べらによる慎重発掘に転換した。

骨片は、頭骨の部分のようで、北側に暗褐色の土の色より白く、頭骨の円形カーブを見ることができた。また、歯と思われる部位にはより白色の破片も見える。エナメル質の部分と思われた。また、南側には大腿骨の部分と思われる白色部が南北ではなく東西につながっていた。屈葬が想定された。竹べらでも骨の検出はうまくいかないと思われたため、バターナイフとティスプーンを購入し、骨から離れた部分の掘削、排土用とした。骨の周囲や骨と埋土との分離には焼き鳥用の細い竹串を主たる道具とした。

骨から埋土の皮を剥ぎ取るように、１㎝の深さを目安に骨を露出させていった。作業は、足骨部分と思われる南側を中心に検出を進めた。大腿骨や脛骨と思われる残存部を３本検出。２本は左足の大腿骨と脛骨、もう１本は右足の脛骨と思われる。左足の大腿骨と脛骨は曲げられていた。頭骨周辺の掘り下げは、より慎重な対応が必要になるため中止した。人骨に関する調査結果は第４章で詳述する。

第４章　熊本県玉名市築地館跡出土の中世人骨

松下真実[*] 松下孝幸[**]

【キーワード】：熊本県、中世人骨、土坑墓、側臥、男性骨、保存不良

1　はじめに

熊本県玉名市築地上 1816 に所在する築地館跡（ついじやかたあと）の発掘調査が民間アパート建設に伴って 2016(平成 28) 年におこなわれ、１基の土坑墓 (S10) から人骨が検出された。この人骨には副葬品は伴っていなかったが、後述しているとおり、中世人骨の可能性が強い。

熊本県での中世人骨の出土例としては、熊本市の二本木遺跡群第８次調査区、第 13 次調査区 (松下、2007a)、第 14 次調査区、第 17 次調査区、第 26 次調査区 (松下、2007b)、第 27 次調査区 (松下、2007c)、第 28 次調査区 (松下・他、2008a)、第 31 次調査区、第 32 次調査区 R 地点 (松下・他、2013b)、第 40 次調査区 E 地点 (松下・他、2012a)、第 40 次調査区 F 地点 (松下・他、2010)、第 48 次調査区、第 53 次調査区、第 56 次調査区 (松下・他、2013a)、第 68 次調査区 (松下、2014) および熊本県教育委員会が調査した二本木遺跡群 (市電敷地)(松下・他、2012b)、二本木遺跡群 (さつま荘跡)(松下・他、2012)、二本木遺跡群春日地区第 11 次調査区、二本木遺跡群合同庁舎区の他に、熊本市内の大江遺跡群第 111 次調査区 (松下、2009)、神水遺跡第 41 次調査区 (松下・他、2008b)、上高橋遺跡、南新宮遺跡、花岡山・万日山遺跡群、松山遺跡 (旧植木町)、渡鹿遺跡群第７次調査区、桑鶴遺跡第２次調査区、尾窪中世墳墓群 (旧城南町)(内藤、1973)、塚原中世墳墓 (旧城南町)(内藤、1975) の例がある。

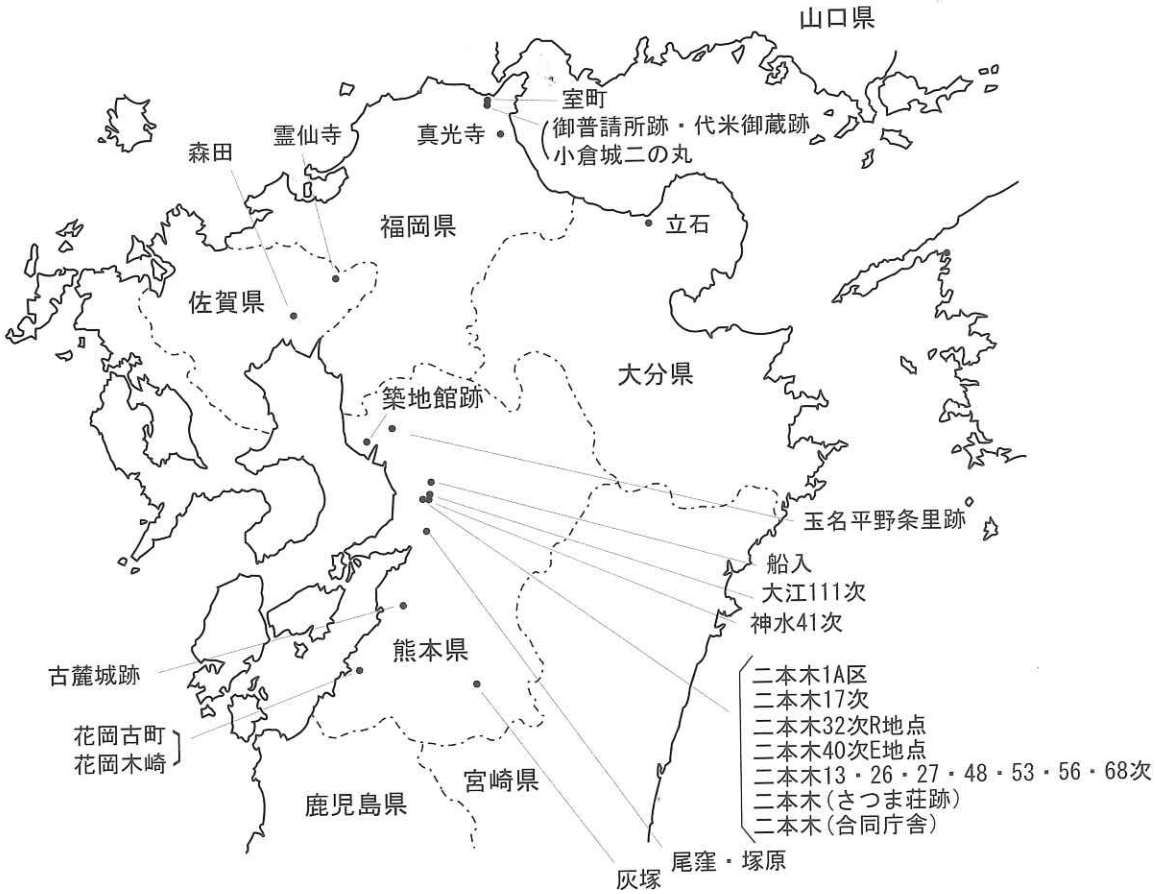
その他、熊本県内では玉名市の玉名平野条里跡、大津町の中島宝満鶴・岩坂葉柳遺跡 (松下・他、2013c)、芦北町の花岡古町遺跡 (松下・他、2013a) と花岡木崎遺跡 (松下・他、2013b)、荒尾市浄業寺 (永井、1965)、宇土市緑川 (故松野・他、1970)、荒尾市杉谷遺跡 (内藤・他、1978)、八代市興善寺町馬場遺跡 (松下、1980)、あさぎり町 (旧深田村) 灰塚遺跡 (松下、2001)、合志市 (旧西合志町) 船入遺跡 (松下、2004) などの例もある。

尾窪から出土した中世人骨は比較的保存状態も良好で、神奈川県鎌倉市の材木座遺跡でみられた中世人骨の特徴である、長頭性、鼻根部の扁平性、歯槽性突顎がみられることがわかり、長頭性、鼻根部の扁平性、歯槽性突顎は関東地方だけにみられる地域的特徴 (地域差) ではなく、汎日本的な中世人の時代的特徴 (時代差) であることを示した貴重な例である。

2006(平成 18) 年に花岡古町遺跡から出土した中世人は中世としては非常に珍しい坐位の姿勢で埋葬されていた。2005(平成 17) 年におこなわれた花岡木崎遺跡の発掘調査では５体の中世人骨が出土したが、男性は高・狭顔、高身長という注目すべき所見が得られている。

本遺跡から出土した人骨の保存状態は著しく悪く、骨が泥化する寸前の様態であったが、現場で人骨の検出をおこない、埋葬姿勢や人骨の観察が可能で、性別や形質の一部を明らかにすることができた。その結果を報告しておきたい。

[*] Masami　MATSUSHITA、[**] Takayuki　MATSUSHITA
NPO 法人人類学研究機構



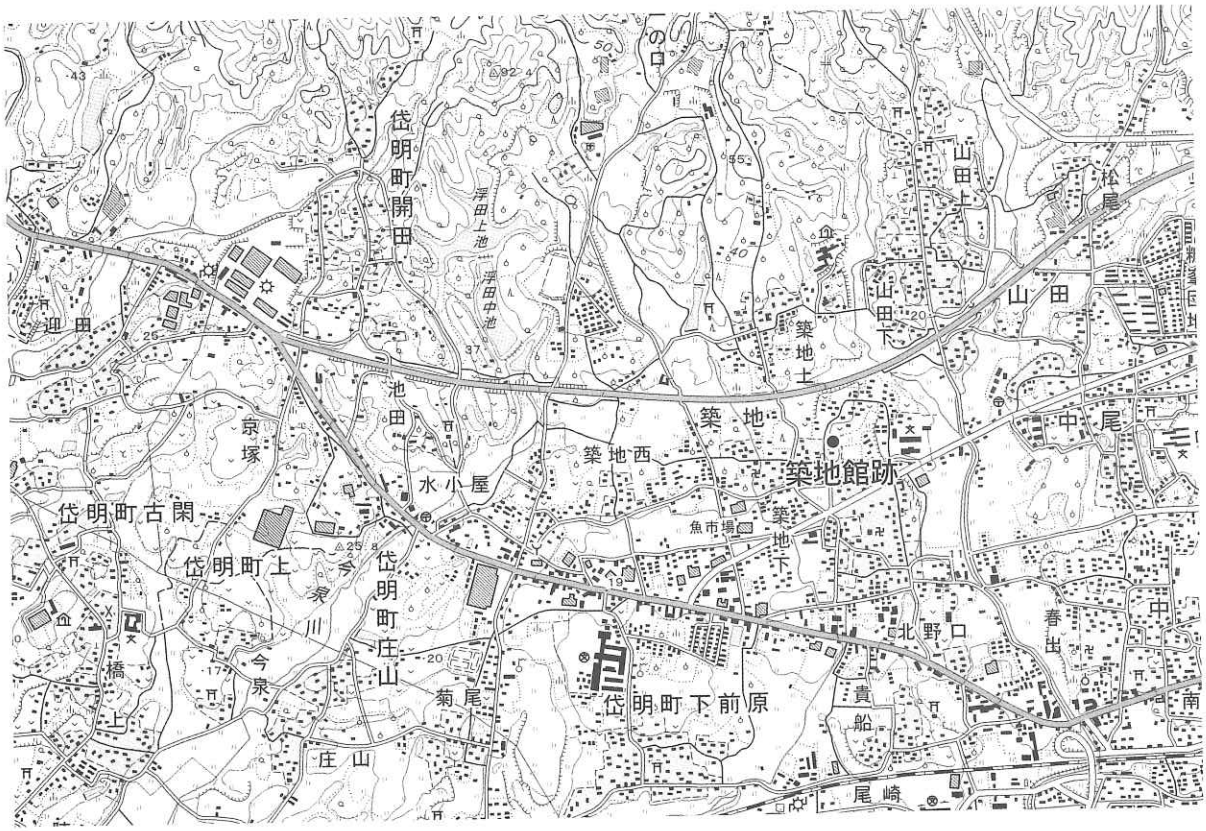
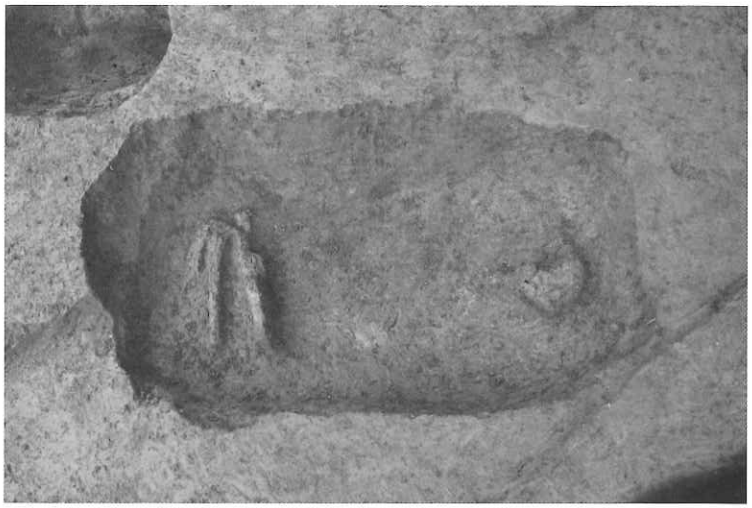


図 1.　遺跡の位置 (1/25,000)
(Fig.1 Location of the ruin of Tsuiji yakata, Tamana City, Kumamoto Prefecture)

2　資　料



本遺跡からは１基の土坑墓 (S10) から１体の人骨が検出された。人骨の保存状態はかなり悪く、ほとんどの骨が脆弱で、泥化寸前の状態で検出された。本人骨は表１に示すとおり、年齢不明の成人男性骨と推測される。埋葬姿勢、頭位などは表２に示すとおりである。なお、本例は年齢を推測できなかったが、参考までに年齢区分を表３に示した。

本人骨は副葬品を伴っていないが、墓が１基しか存在していないことや埋葬姿勢が側臥であることなどからこの人骨は中世人骨の可能性が高い。

表１　資料数（Table 1. Number of materials）

成人			幼小児	合　計
男性	女性	不明		
1	0	0	0	1

表２　出土人骨一覧（Table 2. List of skeletons）

人骨番号	性別	年齢	備考 (頭位、埋葬姿勢、推定身長値)
Ｓ１０	男性	不明	北頭位、側臥（右を下）（156.51cm〔Pearoson 式〕）

表３　年齢区分（Table 3. Division of age）

年齢区分		年齢
未成人	乳児	1 歳未満
	幼児	1 歳～ 5 歳　(第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6 歳～ 15 歳　(第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16 歳～ 20 歳　(蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21 歳～ 39 歳　(40 歳未満)
	熟年	40 歳～ 59 歳　(60 歳未満)
	老年	60 歳以上

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第 14 次発掘調査報告書 (1996) を参照されたい。

3　所　見

Ｓ１０人骨（男性・年齢不明）

（１）人骨の検出状況と埋葬姿勢

S10 から１体の人骨が検出された。埋葬遺構は土坑墓である。平面プラン (形状) は長方形で、長径は約 110cm、短径は約 65cm である。頭位は北。残存していたのは、頭蓋、歯、右側の寛骨、左右の大腿骨と脛骨のみである。頭蓋は土坑墓の北側から右側側頭骨を下にした状態で検出された。左側の大腿骨と脛骨

は膝関節を強屈した状態で、墓坑の短軸に平行になるような姿勢で検出された。右側膝関節も強屈した状態であった。右側大腿骨は、左側大腿骨の真下から検出され、その近位部も左側の近位部の真下に位置していた。このような状態は左右の股関節が重なった状態、すなわち、寛骨が重なっていたことを示すもので、これらのことから埋葬姿勢は側臥であったことがうかがえる。すなわち埋葬姿勢は右を下にした側臥である。上肢骨が残存していなかったので、肘関節の様態は不明であるが、上述しているとおり、膝関節は強屈状態である。

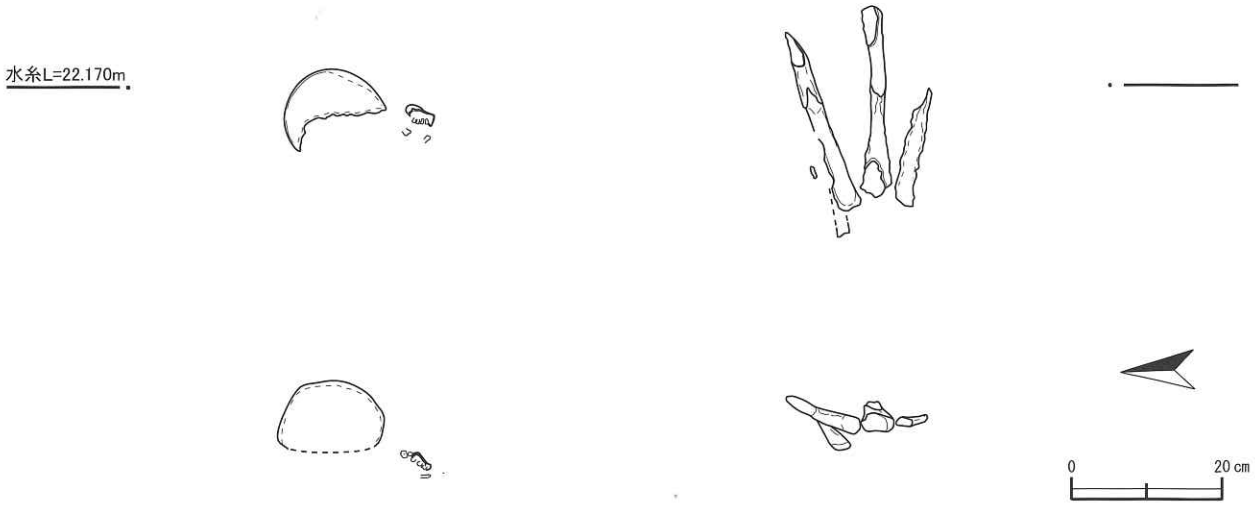


図 2.　S10 人骨出土状況

（2）人骨の形質

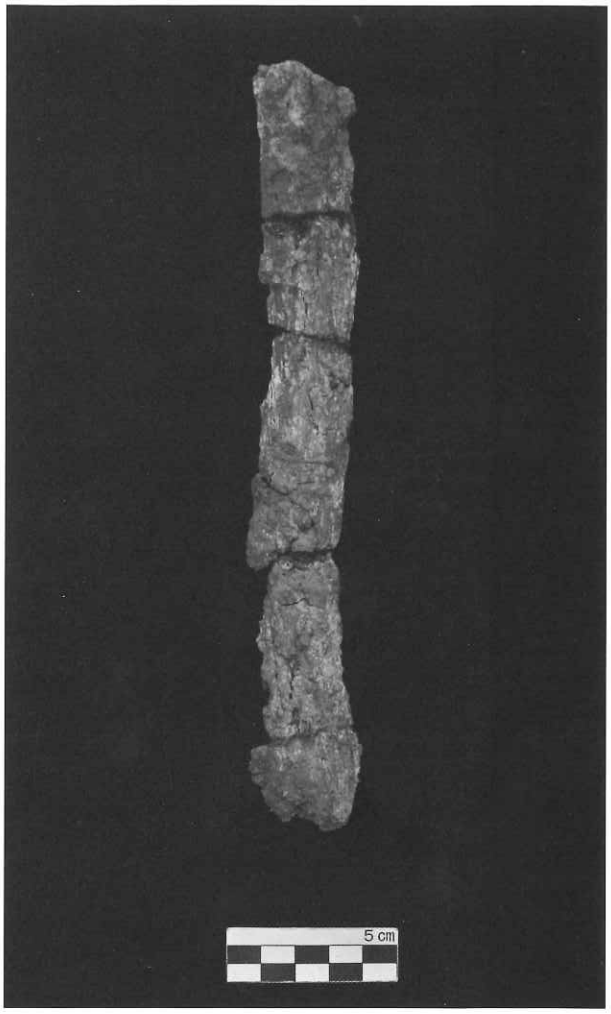
頭蓋は後頭骨や右側側頭骨が残存していたが、かなり脆弱で、痕跡的に残っていた部分が多い。歯は上顎歯と下顎歯とが並んでいる状態を現場で確認することができたが、エナメル質が脆弱化しており、検出途中で、破片になってしまい、歯種の同定はできない。左側大腿骨と両側の脛骨および右側の寛骨の遺存状態は著しく悪く、ほとんど泥化しており、骨種を判別することができたに過ぎない。しかし、右側大腿骨はほかの骨に比べると保存状態は良好で、骨の大きさを知ることができた。観察したところ大腿骨体はやや大きい。右側大腿骨は遠位端を欠損していたが、骨頭を確認することができたので、最大長を推測してみた。最大長は約 40cm 程度しかないようで、長さは短かったと思われる。ちなみにこの推定最大長から推定身長値を算出したところ、156.51cm(Pearoson 式)、153.70cm(藤井式) となり、身長は低い。右側大腿骨は、保存状態がほかの骨よりも良好とはいえ、検出状態を保った状態で取り上げることができず、また計測もできなかった。

大腿骨体の径がやや大きいことから、性別を男性と推定したが、縫合の観察ができなかったので、年齢は不明である。

4　要　約

熊本県玉名市築地上 1816 に所在する築地館跡の発掘調査がおこなわれ、 1 基の土坑墓 (S10) から人骨が検出された。人骨の保存状態はかなり悪かったが、現場でできる限りの観察をおこない、以下の結果を得た。

1. １基の土坑墓から１体分の人骨が出土した。保存状態は著しく悪く、泥化しており、検出状態を保った状態で人骨を取り上げることはできなかった。
2. 遺存していたのは頭蓋、歯、右側の寛骨、左右の大腿骨と脛骨のみである。頭位は北で、埋葬姿勢は右を下にした側臥で、膝関節を強屈していた。
3. 上顎歯と下顎歯を現場で確認することができたが、エナメル質が脆弱化し、破片になってしまい、歯種を同定するまでには至らなかった。
4. 右側大腿骨の大きさを知ることができた。大腿骨体はやや大きい。粗線や骨体の両側面の様態は不明である。現場で最大長を推測することができた。最大長は約 40cm 程度で、長さは短かったと思われる。
5. 推定最大長からの推定身長値は 156.51cm(Pearoson 式)、153.70cm(藤井式)となり、低身長である。
6. 副葬品を伴っていなかったが、埋葬姿勢が側臥であること、埋葬遺構が１基しかみつからなかったことなどから、本人骨は中世人骨と推測される。



右大腿骨　築地館跡 S10 (男性・年齢不明)
(The right Femur from the ruin of Tsuiji yakata S10, male unknown age)

7. 今回出土した人骨は保存状態が著しく悪く、形質的な特徴を知ることはできなかったが、現場で人骨の検出ができたので、骨の大きさや埋葬姿勢を明らかにすることができ、性別も推測できた。保存状態が悪くても現場で詳細な解剖学的、人類学的な観察をおこなうことができれば、性別や埋葬姿勢を明らかにすることも可能な場合もある。現場での情報をみ落とすことのないようにしたい。

謝辞

≪擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた玉名市教育委員会文化課の皆様に感謝致します。≫

≪参考文献≫

1. 松下孝幸、1980：熊本県興善寺馬場遺跡出土の中世人骨。興善寺Ⅰ (熊本県文化財調査報告第 45 集)：145-159.
2. 松下孝幸、2001：熊本県深田村灰塚遺跡出土の中世人骨。灰塚遺跡 (Ⅱ)(熊本県文化財調査報告第 197 集)：239-245.
3. 松下孝幸、2004：熊本県西合志町船入遺跡出土の中世人骨。船入遺跡　一般国道３号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財の調査 (熊本県文化財発掘調査報告第 217 集)：91-97.

4. 松下孝幸、2007a：熊本市二本木遺跡群第 13 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群Ⅱ（二本木遺跡群第 13 次調査区発掘調査報告書）：381-393.
5. 松下孝幸、2007b：熊本市二本木遺跡群第 26 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群Ⅲ（二本木遺跡群第 26 次調査区発掘調査報告書）：126-129.
6. 松下孝幸、2007c：熊本市二本木遺跡群第 27 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群Ⅳ（二本木遺跡群第 27 次調査区発掘調査報告書）：79-84.
7. 松下孝幸・他、2008a：熊本市二本木遺跡群第 28 次調査区出土の古代・中世以降人骨。二本木遺跡群Ⅴ〔二本木遺跡群第 28 次調査区 (E~I・K・L・P 地点）発掘調査報告書〕〔熊本駅西土地区画整理事業にともなう発掘調査報告 (2)〕：178-183.
8. 松下孝幸・他、2008b：熊本市神水遺跡群第 41 次調査区出土の中世人骨（歯）。神水遺跡Ⅹ（第 41 次調査区発掘調査報告書）（都市計画道路船場・神水線建設に伴う埋蔵文化財調査報告 9)：103-105.
9. 松下孝幸・他、2009：熊本市大江遺跡群第 111 次調査区出土の中世人骨。熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成 20 年度－：117-124.
10. 松下孝幸・他、2010：熊本市二本木遺跡群第 40 次調査区 F 地点出土の古代・中世人骨。二本木遺跡群ⅩⅠ（熊本駅西土地区画整理事業にともなう発掘調査報告 (5)）：197-201.
11. 松下孝幸・他、2012：熊本市二本木遺跡群（さつま荘跡）出土の古代・中世人骨。二本木遺跡群 6（春日地区第 9・10 次調査）（熊本県文化財調査報告第 274 集）：424-435.
12. 松下孝幸・他、2013a：熊本県芦北町花岡古町遺跡出土の中世人骨。花岡古町遺跡（芦北町文化財調査報告書第 4 集）：184-105.
13. 松下孝幸・他、2013b：熊本県芦北町花岡木崎遺跡出土の中世人骨。花岡木崎遺跡（芦北町文化財調査報告書第 3 集）：191-222.
14. 松下孝幸・他、2013c：熊本県大津町中島宝満鶴・岩坂葉柳遺跡出土の弥生・中世人骨。中島西鶴遺跡・中島宝満鶴遺跡・岩坂葉柳遺跡・岩坂樋ノ口遺跡（迫井手地区経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査）（大津町文　化財報告第 10 集）:291-297.
15. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群春日地区第 11 次調査区出土の古代・中世人骨。（投稿中）
16. 松下孝幸・他、熊本市渡鹿遺跡群第 7 次調査区出土の中世人骨。（投稿中）
17. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群（合同庁舎）出土の古代・中世人骨。（投稿中）
18. 松下真実・他、2012a：熊本市二本木遺跡群第 40 次調査区 E 地点出土の中世人骨。二本木遺跡群 18（熊本市の文化財第 18 集）：91-96.
19. 松下真実・他、2012b：熊本市二本木遺跡群（市電敷地）出土の古代・中世人骨。二本木遺跡群 6（春日地区第 9・10 次調査）（熊本県文化財調査報告第 274 集）：411-423.
20. 松下真実・他、2013a：熊本市二本木遺跡群第 56 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群 20（熊本市の文化財第 26 集）：109-114.
21. 松下真実・他、2013b：熊本市二本木遺跡群第 32 次調査区 R 地点出土の中世人骨。二本木遺跡群 21（熊本市の文化財第 27 集）：225-228.
22. 松下真実、2014：熊本県熊本市二本木遺跡群第 68 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群 24（熊本市の文化財第 38 集）：96-102.
23. 松下真実・他、熊本市二本木遺跡群第 17 次調査区出土の中世人骨（投稿中）
24. 松下真実・他、熊本市二本木遺跡群第 53 次調査区出土の中世人骨（投稿中）
25. 故松野茂・他、1970：熊本県宇土市緑川の中世時代早期の遺跡出土の頭骨について。熊本医学会雑誌、44：999-1016.
26. 永井昌文、1965：荒尾市浄業寺中世人骨について。浄業寺と小代氏（荒尾市文化財報告第 1 集）：51-53.
27. 内藤芳篤、1973：人骨。尾窪－熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査（熊本県文化財調査報告 12)：62-78.
28. 内藤芳篤、1975：塚原中世墳墓・丸尾 5 号墳出土の人骨について。塚原（熊本県文化財調査報告第 16 集）：317-322.
29. 内藤芳篤・他、1978：杉谷遺跡出土の中世人骨。大園山・杉谷遺跡（熊本県荒尾市文化財調査報告第 3 集）：116-122.

第５章　総括

１　はじめに

築地館跡は、築地の地に築かれた中世の館跡です。住んでいたのは、地名を冠した築地氏という武士集団と考えられています。館跡の発掘調査は過去 10 回行われていますが、出土遺物は少なく、重要な遺構の検出も少ないようです。それは館の重要な区域の調査がないことも関係しています。そのため、館の年代や建物の配置など館の構造が明らかではありません。ここでは、今回の調査の成果をまとめるとともに、築地氏や築地館について、現在までに明らかになった成果を整理し、課題を把握することで今後の調査の備えにしたいと思います。ただ、古文書研究の整理は荷が重いため、玉名市史や関連文献を参考にして整理したいと思います。

２　今回の調査成果について

最大の成果は、中世の掘立柱建物の発見です。梁行２間×桁行３間の母屋の四面に庇を付けた建物は一般住居より格上の建物です。先述したように、今回の調査区は削平が深く及んでいるため、掘立柱建物の多くが消滅している可能性があります。おそらく、今回の調査区を含めて周辺には、四面庇付掘立柱建物の他にも掘立柱建物がかなり建てられていた可能性があります。

また、平成３年の縄張り調査と平成 14 年度確認調査（第１図）での堀跡の発見から判断すると、今回の調査区は築地館の北東に突き出た部分になります（第９図）。つまり、館の東を大きく南北に画する堀の外に隣接するように造られた郭（くるわ）であり、その中に四面庇付掘立柱建物などの建物群が存在したと推定できそうです。近世城郭でいえば出丸に似た機能を持っていたのではと考えられます。

堀立柱建物の時期は、柱穴から出土した土師器皿の型式から見ると、ほぼ 13 世紀代と見てよいものです。また、包含層や遺構面上から出土した中国陶磁器の年代観とも矛盾しません。つまり 13 世紀代には建物があったと言えます。

Ⅱ区中央部で検出された土坑墓（S10）に埋葬された人物については、身長が 155cm 前後の男性で、土坑墓が１基のみであることから中世人骨の可能性が高いという所見を得ました。この男性はなぜこの地に埋葬されたのでしょうか。一つの解釈として、郭（くるわ）を守護する目的を持って埋葬されたと考えてみてもよいのではないでしょうか。

３　これまでの築地氏・築地館についての成果

これまでのさまざまな歴史・考古の史・資料を網羅した玉名市史から中世の築地氏に関係する記述を集めると次のようになります。

① 築地氏は、大野一族の開祖とされる大野小次郎紀国隆の次男築地二郎国秀に始まる一族とされている。

② 大野国隆は、建久４年（1193）に鎌倉幕府から玉名地方の大野の地に 250 町を給せられ、地頭に任命されるが、それは、おそらくそれ以前の平安時代末期に開発領主として勢力を強め、日置氏の代わりに玉名郡の郡司となったからであろう。

③ 大野国隆は３人の息子（嫡子中村太郎時隆、二男築地二郎国秀、三男大野三郎秀隆）と５人の娘聟（中尾氏、山田氏、岩崎氏、尾崎氏、河崎氏）に領地を分け与え、惣領職は三男の大野三郎秀隆としたとしている。しかし、嫡子や惣領職については疑わしい。

④ 文永 11 年（1274）の「モンゴル襲来（元寇）」の際には、玉名地方の８人の武士の一人として築地諸太郎隆能が参戦しており、13 世紀頃には玉名地方で力を持っていたことがわかる。

⑤ 各種の古文書調査によれば、惣領職が三男大野秀隆の系譜になったのは 13 世紀後半以降のことであり、それまでは築地氏が惣領職だったのではないか。

⑥ 築地氏は鎌倉時代以後にその名がほとんど登場しないことから、南北朝時代以降は築地氏の勢力が衰えたのではないか。

⑦ 築地館跡のすぐ南に位置する浄光寺あたりが、古代から続くと思われる大野氏の本拠地であり、一族の惣領職が築地氏を名乗ったのではないか。

そして、築地館跡の発掘調査に関係する成果を挙げていくと次のようになります。

⑧ 平成 21 年玉名バイパス建設に伴い、県教育委員会が行った調査で、小代山から南北に続く台地状の尾根を東西に分断する堀跡が２条（SD01・SD05）発見された。これらは、おそらく築地館の北を区切る堀と推定される。

⑨ 平成３年度に行われた築地館跡の縄張り調査で、館の大まかな規模やくるわ郭が明らかになった。

⑩ 平成 14 年度確認調査地点（第１図）で、南北に続く堀跡が発見された。この堀は館の北東部の郭の東を区切る堀と推定される。

⑪ 平成 15・20 年度の確認調査地点（第１図）では遺構は検出されなかったものの、東から谷が入り込んでおり、自然の防御となっている可能性が大きい。

⑫ 平成 18 年度の確認調査地点（第１図）では、多数の柱穴が検出された。おそらく築地館の南東部にも郭（くるわ）が存在した可能性が強い。

4　課題

築地氏に関する史料研究の課題は２つほど挙げられます。一つは、古文書『大野家由緒書上』の内容に関する真偽です。この文書は弘治三年 (1557) 紀宗善によって、大野一族の由来や系譜、それに領地に関することがらが記録されたもので、成果の①～③はこの文書を基にしています。したがって、この文書の信憑性を常に検討していく必要があるのです。というのもその内容は平安時代末から鎌倉時代初期のことであり、書かれた年の 1557 年から約 400 年も昔のことになるからです。玉名市史で指摘された成果⑤は、他の古文書調査の結果を踏まえたもので蓋然性が高いと思われます。そして、『大野家由緒書上』が書かれた当時の玉名地方の時代背景を押さえておく必要があるということです。その前後には、大友氏、龍造寺氏、島津氏の高瀬への侵攻があり、豊臣秀吉が九州平定の際、高瀬に陣を張り、平定後、肥後北部を中心に国衆一揆が勃発しています。つまり、戦国末期の激動の時代に作成されているのです。作成した意図は何だったのでしょうか。地域武将の力が拮抗し、常に死を意識せざるを得ない時代、亀甲地区に本拠を構えた紀宗善が大野一族の主導権を握るため、自らの出自が大野一族の本流であることを後世に示す必要性から作成されたとする玉名市史の指摘もうなずけます。

二つめは、⑥に挙げたように、築地氏の消長です。築地氏の名は足利尊氏東上の際に菊池氏と一色氏の戦いがあり、一色側の武将として「築地七郎」の名が出てくるそうですが、それ以降は築地氏の名は古文書に登場しないようです。玉名市史にあるように築地氏が大野一族の惣領家であれば重要な問題です。名前が登場しない理由として２つのことが考えられます。一つは、やはり南北朝以降に武士集団としての力が弱まり家系が途切れたということです。もう一つは、築地から他の名称に変えたということです。「大野」の名は国衆一揆で最後まで生き延びた６人の国衆の一人として名が出てきますから、大野の名に変えたことも考えられます。または大野一族の他の氏名である中村、山田、田嶋、岩崎などに変わったとも考えられますが、今のところ不明です。

二つめの課題の解決には、考古学的な研究からも迫れます。⑦～⑫は築地館跡に関する考古学的な調査の成果です。この中で⑦に関して浄光寺跡の調査が進めば、平安時代末期の大野氏の居館が発見できる可能性があります。また、⑧～⑫は現在の築地館跡の調査成果ですが、調査が積み重なれば、築地氏の惣領問題や、築地氏の消長問題を解く糸口になります。実は現在の築地館跡の規模は東西２町、南北３町ほどになり、武士の館としては惣領家にふさわしい大規模な構えになっています。また、調査の中、出土遺物から年代を判断することができるため、いつまで館が使用されたのかを知ることもできるのです。

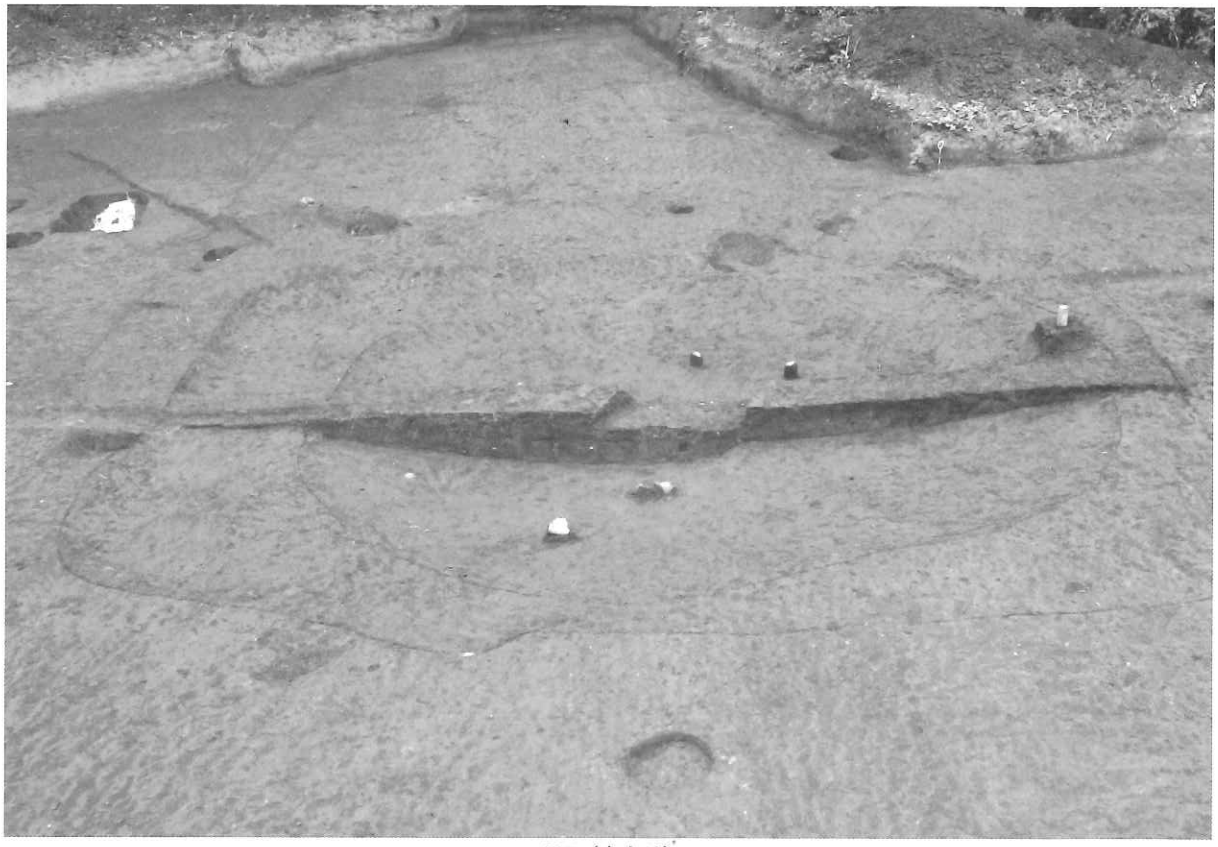
現在、館の北の構えと北東の構えが明らかになりつつあります。北には堀が複数つくられた可能性があり、北東には館に隣接する郭（くるわ）を築造していたようです。近世城郭では出丸にあたります。また、この規模は浄光寺の規模と類似しています。今後は、西側、南東部、南側、それに中心部の構えを明らかにする必要があります。それらの調査の中でさまざまな課題を解決することができます。ただ、考古学的な発掘調査はいつでもすぐにできるものではありません。一つ一つの調査を確実に行い、得られた情報を課題に結びつけていく作業が必要です。

※　参考文献一覧
〈玉名市の歴史に関して〉
①『玉名市歴史ガイドブックふるさと文化財探訪』平成20年3月　玉名市教育委員会
②『玉名市史』全8巻　玉名市
〈築地館跡の調査に関して〉
①『玉名市内遺跡調査報告書Ⅰ－平成11・12年度の調査－』玉名市文化財調査報告書11集　平成14年3月　玉名市教育委員会
②『玉名市内遺跡調査報告書Ⅱ－平成13・14年度の調査－』玉名市文化財調査報告書13集　平成16年3月　玉名市教育委員会
③『玉名市内遺跡調査報告書Ⅲ－平成15・16年度の調査－』玉名市文化財調査報告書15集　平成18年3月　玉名市教育委員会
④『玉名市内遺跡調査報告書Ⅳ－平成17・18年度の調査－』玉名市文化財調査報告書17集　平成20年3月　玉名市教育委員会
⑤『玉名市内遺跡調査報告書Ⅸ－平成24・25年度の調査－』玉名市文化財調査報告書33集　平成29年3月　玉名市教育委員会
⑥『築地館跡－一般国道208号玉名バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』熊本県文化　財調査報告第283集熊本県教育委員会
〈玉名市内の中世城館・津の調査に関して〉
①『高瀬湊関係歴史資料調査報告書(1)』玉名市歴史資料集成第１集　昭和63年3月　玉名市
②『岩崎城跡』玉名市文化財調査報告書第12集　平成15年3月　玉名市立歴史博物館
③『玉名市史－通史編上巻－』「浄光寺の調査」　平成17年3月　玉名市
④『伊倉城跡－伊倉城跡範囲確認調査報告－』玉名市立歴史博物館史料集成第５集　平成15年3月　玉名市歴史博物館
⑤『伊倉城跡－市道船津宮原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査－』玉名市文化財調査報告書第27集　玉名市教育委員会
⑥『玉名市内遺跡調査報告書Ⅰ－平成11・12年度の調査－』「下村城跡」「岩崎城跡」　玉名市文化財調査報告書11集　平成14年3月　玉名市教育委員会
⑦『玉名市内遺跡調査報告書Ⅱ－平成13・14年度の調査－』「保田木城跡」「岩崎城跡」「中村館跡」　玉名市文化財調査報告書13集　平成16年3月　玉名市教育委員会
⑧『玉名市内遺跡調査報告書Ⅲ－平成15・16年度の調査－』「岩崎城跡」　玉名市文化財調査報告書15集　平成18年3月玉名市教育委員会
⑨『玉名市内遺跡調査報告書Ⅴ－平成19年度の調査－』「横島城跡」　玉名市文化財調査報告書15集　平成21年3月　玉名市教育委員会
⑩『高岡原遺跡－玉名市山田における店舗新築工事に伴う文化財調査報告書－』玉名市文化財調査報告第35集　玉名市教育委員会
〈出土遺物に関して〉
①『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』大宰府の文化財第49集　平成12年3月　太宰府市教育委員会
②『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　2001年　真陽社
③『中近世土器の基礎研究Ｘ』「熊本県における中世前期の土師器について」美濃口雅朗　日本中世土器研究会

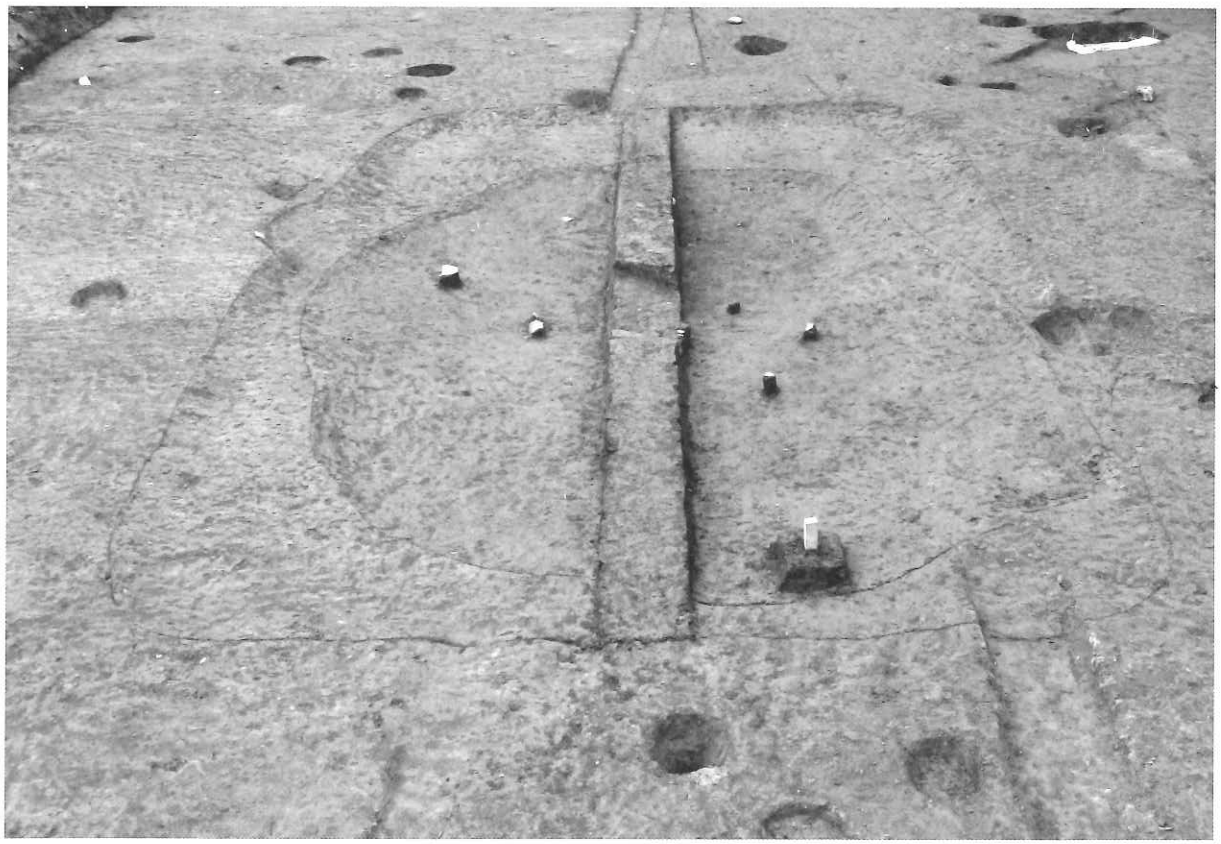
S01（南より）

S01（西より）

図版 1　S01 遺構写真



S05（南より）



S05（東より）

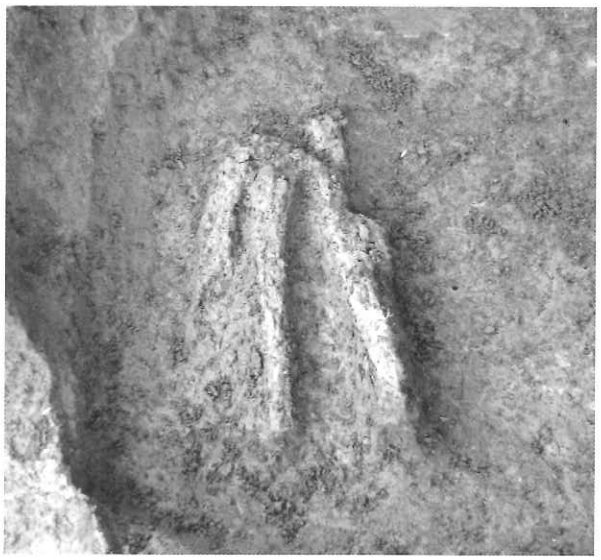
図版 2　S05 遺構写真

S09（東より）

S10 人骨出土状況（西より）

S10 人骨出土状況（南より）

図版 3　S09 遺構写真・S10 人骨出土状況写真



S10 人骨下肢部出土状況（東より）

S10 人骨頭部出土状況（西より）

S10 完掘後（西より）

S10 完掘後（北より）

図版 4　S10 人骨出土・S10 完掘後遺構写真状況写真

報告書抄録

ふりがな	ついじやかたあと
書　　名	築地館跡
副 書 名	玉名市築地における共同住宅新築工事に伴う文化財調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	玉名市文化財調査報告
シリーズ番号	第３８集
編著者名	古森　政次
編集機関	玉名市教育委員会
所 在 地	〒865-8501 熊本県玉名市岩崎 163
発行年月日	2018 年 3 月 27 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
築地館跡（ついじやかたあと）	玉名市築地字八反（たまなしついじあざはったん）	43206	212	32° 56′ 13″	130° 32′ 10″	20161011 ～ 20161115	650	共同住宅

主な遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
築地館跡	包蔵地	弥生時代後期 中世 近世以降	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 （2 間× 3 間に 4 面庇付き） 土坑墓 溝	弥生土器 土師皿 近世陶磁器	大野氏に関連する館跡と推定され、館に伴う 13 世紀代の建物跡と土坑墓を確認。

玉名市文化財調査報告　第 38 集

築 地 館 跡

―玉名市山田における共同住宅新築工事に伴う文化財調査報告書―

平成 30 年 3 月 23 日印刷
平成 30 年 3 月 27 日発行

編集発行　玉名市教育委員会
〒865-8501　熊本県玉名市岩崎 163

印　　刷　（有）岱明印刷
〒869-0222　熊本県玉名市岱明町野口 2281-2
TEL 0968-57-0141